

昭和四十二年四月二十七日 〓講演

「学問と人生」

日本大学教授 高山岩男先生

近年日本も驚くべき復興を見せて、よくレジャー時代という事が云われているが、レジャーに対して日本人は何か深く考えているものだろうか？ 文明が進むにつれ、今日欧米の一流国は福祉国家となり、レジャー時代に入っているが、日本も一流国のしんがりに付随し、まずレジャー時代に入ってきている事は驚くばかりである。

戦前と敗戦直後の日本の悲惨な姿と今日を比べてみると、今日の日本は驚くべき復興である。我々から見ると日本が、レジャー時代と云ってよい状況に入ったと云う事は大変な事だと思ふ。ところがレジャー時代と云うとただ徒らに遊ぶと云う風な事で暇をつぶすと云う傾向が非常に強いのであるが、一体にレジャーと云うと大変な事で、皆さんが云うスクール(学校)と云う字は大体ドイツ語ではシュールと云い、これはギリシヤ語から出ていてスコールと云う字で、このスコールは驚くなけれ「暇」と云う意味で実にレジャーである。

ここまで書けば、ギリシヤの文化史について多少でも知識のある人はもうおわかりと思うが、実はレジャー、暇のある階級、いわゆる有閑階級が文明と云うものを生み出したのであって、ギリシヤ、ローマでは奴隷制社会であったから、日常の雑事は奴隷にまかせ、自由民である市民(つまり有閑階級、レジャークラス)が、後に西洋文明となって一層の発展を遂げるような精神文明と云うものを生み出したのである。哲学は勿論、一切の学問から芸術まで、皆そう云う意味ではスコール、レジャーの産物であり、暇のある人が学校で研究したのである。こう云うまともなレジャーのあり方について考えると、パチンコだの競輪、競馬だのに暇を費やす状態を見ると、どこか少し狂っているのではないか？ こう云う感じを持つのであって、これは我々古い者の頭が狂っているから世の中が狂っているように思ふのかも知れないから、皆の健全なる常識の判断に任せるとして、どうも人類は一種の狂った方向に進んで来て

いるのではなからうか、とこう云う感をせざるを得ない点があるのである。

もう十年程前、南方東南アジアに対する経済援助、技術援助が問題になった時に会合があり、その席上で永年戦前から東南アジアの諸国と長く貿易をし、東南アジアで生活していた老人が次のような話をした。「欧米の人や日本人はすぐ勤勉と云う事を東南アジアに行つて要求し、又説教するが、これは途方もない勘違いだ。例えば、ある地域で日本の農業技術家が、日本の米作技術を指導した。そうすると今迄の二倍三倍の収穫がある。この技術を習得した結果、何が起きたかと云うと、その東南アジアの民族は今までの二倍収穫のあった翌年は、なにもせずブラブラ寝て暮した。つまりレジャーを楽しむ理由、三倍収穫のあった場合は、二年間何もせずレジャーを楽しむ。勤勉と云う事は、実に日本人やヨーロッパ人の特性であつて、現地人にはいくら説いてもわからない」。私はこの話を聞き、ある意味でショックを受けると共に、

なる程といろいろと感じさせられた。

さて人類の文明はどこあたりから開けて来たかと云うと、赤道直下の熱帯地方からである。オリエンツのような砂漠地帯に近い地域も、今のパキスタン、インドからインドネシアに亘るモンsoon地域もあるが、ともかく人類文明の発祥地は今日で云う北——南北問題などという北の方——つまり温帯から寒帯に属する地方でなく、実は熱帯である。よく考えるとこれは衣食住と云う人間生活に必要な基本になる事に、大して苦勞のない地域から人類文明が発達している。暖かいし、暑いので衣類に苦勞する必要もなし、夜はヤシの葉の下で寝ると云う事も出来る、こう云う考えようでは極めて天然の恩恵の多い所、衣食住の心配のない所から大体文明が発生している。そうして人類の歴史が示めす所では、人類の文明はだんだん北進し、温帯から寒帯の方へと北上した。ここは熱帯ではないから、衣食住と云うものに苦勞がいる。寒を防ぐ為に着物の上でも、住居の上でも苦勞がいり、更に食料の上でも耕して増産するという事が必要になり、南方の恵まれた地域から比べれば、非常に欠乏のある所で、この為に何が起きたかと云うと、技術上の發明をし、食料を増産し、あるいは苦心、工夫をして衣類を作り、それを着て、家屋も作る、常に欠乏状態にあるから、今日の言葉で云う科学になるような自然

の知識とあるいは自然を征服するような技術上の改良を常に加え、一言で云えば、文明の進歩、発展を絶えずやりながら生きて行くより他はなかった。

ここで始めて勤勉と云うものが生まれ、バナナ、パイナップルが自然に豊富にある所では耕して食べる必要もなく、欠乏地域の民族から見れば極めて怠惰な状態にある。これに対し、温帯地域に住む民族は勤勉でなければならなかった。

今迄の事でなぜ南方というか赤道直下の古い文明地域が、古代に素晴らしい人類文明を生みながら、唯それだけに終り中世もなければ近代もない、云わば停滞状態になぜあの辺が入ったか、そうして温帯地域に属する民族からは、絶えず発展、進歩する文明が生まれて今日に來たか、古代もあれば中世もあり近代もあるよう云う進歩、発展をしたかと云う事に対する基本的な解決が出てくる。

ともかく南方には我々から見れば怠惰といわれるようなものが当たり前だと云う、特にこれを悪徳と思う我々の地域に住むものは、勤勉でなければ生活して行けなかった。こう云うのが自然だと云う事がわかる、これは云わば近年までの人類文明の状態ではなかったかと思う。ところが社会制度の上でも国家組織の上でも十九世紀から二十世紀に入っただんだん変わってくると、国家観念も、野性国家的観念から福

祉的国家観念に変わってくるという。

更に經濟がその要求にびったり応じて、技術上の革新からマスプロの状態に入ると云う具合にして、一流の国家は今日は非常に豊かな国家になった。従って労働時間が極めて少なくてすむと云う方向へ入って来たわけである。日本も少なくとも一流国家のしんがりについて来ているのであつて、我々から見れば驚くべき生活水準の向上がある。

さてこの結果レジャー時代と云うものに入つたのであり、これによつて文明の最も進んでいる国は一体どのような状態に突入しつつかるか、これを考へてみる必要があると思う。「ゆりかごから墓場まで」と云う福祉国家を念願しているのがイギリスであつて、もつと進んでいる北歐の国もある。ニュージールランドあたりはなお進んでいると云う事が統計の上からも云われている。ともかく西歐の進んだ国々は、以來福祉国家に入つて労働時間も少なくなり、労働階級の福祉というものが非常に上つて來ている。

さて課題は「今日のイギリスはどう云う傾向をたどつて來つたか」。イギリスは御存知のように斜陽國家の線をかかなり急角度で落ちつつあると云う事、一流國家の線を落伍しつつある事は事實である。更に戦後素晴らしい急激な復興をみせた西ドイツが、この頃あやしげな傾

向をたどって来ているという。私も先頃西ドイツを見て参ったが、労働力が非常に不足し、十五、六年前には見られなかったスペイン人、イタリヤ人が働いている光景を見たり、又日本からも炭鉱等に行っている事などを見て、それ程労働力が不足であったが、現在では失業が相当増えていると云う状態なのである。どうしてこのような現象が起きて来ているか——やはり福祉国家が行き過ぎ、つまりレジャーが多くなり過ぎたと云う事——これが大きな根本原因ではないのか。ここに一流の福祉国家が下降線をたどり、えらいところに落ちこもつていく。

さて我が日本はこう云う所へ入りこんでいない。しかし、レジャーの使い方を見ると、かつてイギリス人がスコートを学問芸術と云う精神文化を生み出すのに使ったのに、日本人はパチンコ、競輪、競馬に時間を費やすという状態を見ると、結局勤勉という、いわばつい最近までのヨーロッパ文明、日本文明を生み出した一番基本的な精神力というものが漸次落下して行き、やがて消えて行き、東南アジアの原始状態と同じものに帰ると云う懸念を持つのであり、実に文明と云うものには奇妙なパラドクシカル (Paradoxical) な運命があるものと云う。東南アジアの云わば後進国が、文明の極致の状態に昔から入っているのであって、と

云うよりは文明は進めば進む程、原始状態と変りないものに逆転するのではないか。こう云う事を考えるのであって、もしそうであるなら、一、二の偉い政治家が、学者が、予言者が出来たからと云って、この傾向を防ぐ事は出来ないのではないだろうか。つまり文明が進んで行く、技術上の革新が進めば進む程、国家は福祉国家になり、レジャー時代に入り、結局人間が自堕落になって滅んで行くという。こう云う不思議な運命がないとはいえない。

どうすればこう云う、いわば一種の運命的な悲劇を避ける事が出来るのか。これが今日の大きな問題ではないだろうか。レジャー時代よし、文明時代よしと文明を徒らに礼讃するかも知れないが、文明の極致が実は野蛮への復帰である、こう云う異常に不思議な運命が文明の進歩の中に潜んでいる。もしこれを欲しないならば、何とか返すに足る人知の極致を尽さねばならぬ様な難問があると云う事をやはり考える必要があると思う。この難問を初等数学の問題でなく、高等数学的問題にあたる難問だと云う事を胸にいだいて、これと取り組む覚悟がなければならぬと思う。レジャーの問題からこのよな事を云って来たが、レジャーだけの問題でなく、もし考えるならば困るから横道に入るが、文明が進む程知らぬ内に野蛮に復帰しているという状況がいくらかもあるのだと云う事を一、

二の例をもって云って行きたい。

今日の物理学というものは、アインシュタイン以来べらぼうな復興を遂げ、今日核物理学になって来ている事は御承知の通り。さて人間が今日の進んだ原子物理学によってまず宇宙の真相をつかみ始めたと思う頃に、核エネルギーを解放すると云う途方もない技術の一端をつかむと云う、これがまことに悲しい事に、原子爆弾という殺傷の武器となって人類に姿を現わしたのである。それ以来、核ミサイル兵器というものが、各国に出来つつある。

今この問題から出てくる政治問題は抜きにし、この問題を深く考えてみる必要があると思う。一体に核兵器、核ミサイル兵器など、これは兵器なのだろうか。兵器であるのか兵器にあらざるものなのか、疑惑が生じてくると思う。「核兵器、核ミサイル兵器は兵器なるや」と云う疑問を出して考えてみると、大変な疑惑が生じてくる。なる程、兵器として開発したと云う意味においては兵器であるが、但し兵器というものは一体なにか？ 敵の抗戦意志を叩く、レジスタンスの意志を諦めさせる、破壊するのが兵器である。敵の抗戦意志を破壊しないような兵器は今日では兵器ではないのである。但し逆にこれを使えば敵の抗戦意志をなくすどころか、敵、味方をも消えてなくなると云うものは、これはもう兵器ではない。兵器の中には適格性

の範囲があり、この範囲を超えれば不資格である。戦争の目的、戦闘の目的と云う手段に合わない。この様に適格性の限度があると云う事は、兵器であつて兵器であらざる性格が濃厚なのである。であるから何十メガトンとか、水爆などは全く兵器とは云えない、つまり「戦力核兵器は兵器であつて兵器でない」と云うのが正解である。そうすれば核ミサイル兵器を無制限に使う戦争は、戦争ではない。戦争には違いないが戦争ではない。実に不思議な矛盾が出てくる。

この様な核ミサイル兵器などを持つて防備した国防などは、人類史始まって以来、有史以来の最強の防備である。ところがこの兵器は使えない。使えない兵器を持つて国防をしても何ら役に立たない。つまり最後の国防は最弱の国防と云う奇妙なパラドックス（逆説）が出てくる。最も文明的な戦争が最も野蛮な戦争、いわば文明の極致と野蛮の極致が一致する。これは何もレジャー時代だけの現象ではない。

昔、少なくとも第二次世界大戦前までは、お互いに新兵器と云うものを隠したものであるが、今日核ミサイル、核兵器についてひたすら隠したらどうなるか？ 敵のミサイル戦争を抑制する力が弱まるだけなのである。つまりこのような兵器はひたすら隠していたのでは戦争を抑制する力がないから、お互いにこちらはこのような物を持つているとわからせる事が必

要となつてくる。実際、昔と違い、国家の最大機密である軍部機密を、知らしむべからず、知らしむべしと曲芸の様な芸当をしなければならぬ段階に入った。こう云う奇妙な事が出ていて、単純なロジック（論理）などもう理解出来ない世の中に入った。この世の中へ入つたと云う事を知っていると、大きな過失もしないですむ。ともかく文明の極致の状況が案外知らぬ内に原始時代へ逆戻りしていると云う事を知つていなければならぬ。

次にテーマを変え、活字文明は、ラジオ・テレビの電波文明がいくら発達しても、依然として衰えずに進歩している事は御承知の通り。さて読書界を見ると、一番よく読まれているのが週刊誌、雑誌の類、次に新書版と呼ばれている小さな本が読まれる。たしかに日本の印刷技術は素晴らしいのであるが、又書店の中で立派な学術的本も出しているし、日本の古典、更に外国の古典も出しているのですが、この発行数は実に少ない物で、いかにダイジェスト文化の様な新書版が読まれ、大きな古典などは殆んど読まれない状態に入っている。

若い世代には、やはり古典というものを讀んで置かなければならない。なぜならば、私達がすぐ口からでる名言も名文章も、皆若い頃に讀んだ本の中から出てくる。だが、古典と云うと

文字通り古くさいもの、だから役に立たないのではないか？ そう云う疑問が生じると思うが、実際、戦後日本人は意識不明の状態に落ち入つたから、古典——すなわち封建的・奴隷社会のものである——は読む必要がないとの考えで追放したが、現在少しずつ見直されて来た。そして古典が追放出来ず、どんどん復活して来た。

ではなぜ古典を復活しようとする意志が一般市民にあるのだろうか。これは何十年來の個人の考えであるが「古典と云うものの意味は、実は古い文（過去二千年以前）は、過去の古い文であると同時に、その真理は過去、現在、未來永遠に亘つて通用するような人間真理を含んでいる」。未來・永遠にまで人生の真理と云うものを予感的に知っている様なものを古典と尊んでいる。一知半解の徒が、過去の物、封建時代の物、奴隷制時代の物だ、こんな物はその当時は役に立っただろうが、現在は何の役にも立たないのだ、と考えやすいが、そこで次の様な事を頭に入れて頂きたい。

それは人生には一途に、ひたすら進歩、発展、向上の過程をたどつて、一旦進歩すれば二度と退歩する事がないものもあるが、同時に進歩もしなければ退歩もしない、発展もしなければ退歩もしない、もう古い過去の時代において、中世でもソクラテスの時代でも、永遠の真理に接

触しているものもある。この様な考えがあると云う事を一応解答の鍵として考えて頂きたい。今の二十世紀の文明、特に十九世紀あたりのヨーロッパのサイエンス、テクノロジーの発展は、人類の一個のイリュージョンの内に消えてしまった。

人類と云うものは無限に進歩するものと云う觀念、なるほどサイエンスの進歩を見ると、たしかに進歩している。テクノロジー（これは十九世紀や二十世紀の十年頃までは大した事はないから、この三、四十年のテクノロジー）の発展と云うものは、前代未聞、革命的だと云う様な発展をとげている。その結果、月まで行くような願望を起している。

これだけ見るとサイエンスとテクノロジー以外の一切の文明、文化も皆こういう具合に向上発展の過程をたどり、絶対に二度と退歩しないものかと云う錯覚に落ち入りやすい。だからよく現代の非行少年が出るとか、戦争が起るとか云われるが、これは自然科学が進んで、精神科学や人文科学が進んでないから、この間にずれが生じて起るのであって、精神科学、人文科学の発展が、自然科学の様に発展していればこの様な事は起らないと思うが、これくらい間違つた考えはない。

人間は二千五・六百年前も二十世紀も、殆んどその智慧と云うものには変りない。が、知識

は大した変化がある。知識も人間一途の向上であるが、人間社会、人生、世の中に関する事は知識とは云わず「智慧」と云う。こう云う智慧は何ら発展、発達もしない、いかえれば人間の智慧と云うものは二千五、六百年前に出尽くしたと云いたい。ではなぜ二千年前と云うのか、イエス・クリストが出て山上の福音を説いたのが約二千年前、二千数百年と云えばギリシャにはソクラテス、プラトンが出、又釈尊が生まれ、お経を説いたし、又同じ頃孔子・孟子が出て偉い智慧を残した。もうこの頃に出尽くしているのであつて何ら上つてはいない。実は下つている場合もある。哲学と美術も同様、彫刻にしても何にしても技術は日進月歩ですが、美術は二、三千年前に達すべき所まで達していた。かつて有名なレオポルド・フォン・ヴァンクと云う有名な歴史家が、「各時代に神に直接接する者がある」と云つた事は名言だと思

う。「これが人類の達しえる最高だ」と云うものが随所にある。我々文明人は、野蛮人と云うものを非常に見下す傾向があるが、ドイツのある地理学者の本にこう書いてあつた。「未開な地域に入つて見ると、素晴らしい文明人と云えども作れないような架橋を作る。現在ならすぐ作れるが、機械を使わず自然にある物を素材としながら橋を作る、と云う課題を出されるならば、これ以上の物は文明人も作れないだろう」と。

これはフライングアートでないテクノロジーに属する領域です。我々人間の中には一途に進歩発展して退歩する事がないものもある。これは私に云わせれば二つしかない。サイエンス、テクノロジー——あとは法律であり、後は日常の實用にも役立つような工芸品にせよ、更に本格的な美術にせよ、あるいは宗教、哲学、又国家の形態にせよ、これ以上のものがないと云うものが、各時代、各地域にある。

戦後は、デモクラシーが最上の政治形態と云う具合に無条件に信じて来たが、デモクラシーが人類不変の原則であるならば、いたる所にデモクラシーが発生した筈だが、ギリシャに起きた。なぜギリシャのアテナイを中心としてデモクラシーと云う政治形態が人類史に初めて出現したのか。ギリシャの地形を見て、自然的条件が島国のようなものであるかと云う事を会得しなければならぬ。商業貿易をしたのがアテナイを中心とするギリシャ民族なので、つまりギリシャは自然地理学的に云えば島国民族ではないが、實質的には模範的な海洋民族である。そして地中海を股にかけてギリシャ文化を植えつけ、植民地を作つた。のちに、アレキサンダー大王がインド近くまでいって、ギリシャ文化を植えつけた。これを一般的にはヘレニズムと云つて、本当のギリシャのヘレニズムと區別している。実に海洋民族、商業にたけた海洋

民族なのである。

一方、大陸民族と云うものは、その後民主政治を生み出したところはどこもないし、民主政治を受け入れても常に失敗して、大陸民族と云うものは専制主義的形態が得意なのである。デモクラシーを本当によく行っているのはアングロサクソンだけで、フランスは民主政治の及落のいずれか？ フランス人がフランス文化と云う事を鼻にかける事は、中華民族が漢文化を鼻にかけると同じ様に、そのまま信じる事は出来ないが、イギリスを物差しとして見る限り、民主政治の優等生だと絶対に云えない。

更にすぐれているドイツも或はソ連も大陸民族であるから、デモクラシーは失敗している。うまくいっている民族は海洋民族である。そして商業を中心としている国、この様な事と政治形態としてのデモクラシーと云うものが、何かしら内面的な関係がありそうだ、不可分な関係がありそうだと云う事に気づくであろう。

ブライスの『デモクラシーズ』という本がある。それによると蒙昧な国にも色々のデモクラシーがある。

国家形態にも傑作もあれば愚作もある。イギリスはデモクラシーの横綱に属するような事を云っているが、イギリスのデモクラシーはただ主権が人民にあり、そんな簡単な分類で説明出来るような政治形態でも何でもなし。第一、

近代的な成文憲法がない。そうしてイギリス人の保守性は驚くべきものである。産業革命以来キヤピタリズムの先頭を切り、労働運動を始めとして、いわゆるソシアリズムの先頭を走った。

実は進歩的なのが保守的なのである。これはなぜか？ 実は保守的でなければ進歩などに奉仕する事は絶対出来ない。日本では保守は進歩の敵などと云うが、ムード的な議論で学者までが解明しない様だが、保守的でない民族に進歩などない。これが一番良い例は、猿は何年たっても猿。人間だけが伝統を作り、言葉をもってこれを伝える事が出来る。であるから親が到達したところから子は出発出来る。つまり前進出来るわけで、これが人類である。ですからこの様に考えれば保守、つまり伝統を破壊しないで、伝統を尊重し、永遠に意味のある古典を守ると云う事が保守であるから、前進が出来る。これからイギリスと云う非常に保守的な国民が、なぜ近代においてあの様な進歩に貢献したか、はつきりわかる。ドイツ人はイギリス人より保守的であり、スイスも保守的である。但しイギリス的なデモクラシーと云うものは、他のどの国も真似の出来ない。あの様な憲法ほどの国も真似が出来ず、イギリス人だからそれを巧みに使いこなす、破綻をきたさない。アメリカ合衆国も民主国の模範の様に云われているが、アメリカのデモクラシーがなぜよく行っているのか、

もつとさかのぼって「アメリカとはなんぞや」と云う研究が必要になってくる。

この様な問題に解答を下すものにあまりぶつからないが、ただヒントとしてアメリカは歴史なき国である。古代も近世もなく、他の国に置いてきぼりにして来ている。その結果、全く歴史的真空と云って良いあの地域で、イギリスのジョン・ロック先生の説いた民主主義の議論を実験する様に実行し、成功したのである。アメリカのデモクラシーを他の歴史的國家(古代も中世もあつた國家)に移しても、うまくいかないし、又もしうまく行ったら不思議である。インドで栄えた仏教が日本へ来て、日本人の心の糧になるには、やはり数百年たち、この時にはもうインド的でもなく、日本人の宗教的精神体験から来た日本人の宗教になっている。これと同じ事なのである。

要するに、根本的には「ザ・デモクラシー」と云うものはない、あるものは「デモクラシーズ」と云う歴史的なものだけなのだ、長くは数百年、短くも何十年、百年に亘ってその民族が失敗し、あるいは改造してその苦心粒々築きあげたものだけが残っている。この事を文化史の方からちゃんと知り、一体、デモクラシーと云うものは複数なるか、単数なるや？ 一体、自由主義、デモクラシーと云うものは、海洋民族的なものか？ 大陸民族的なものか？ 砂漠

民族的なものか？ この様な疑問を起して考
えてみると、なる程今迄の事が理解出来る。

我々日本人ぐらゐ、流行に左右される民族は
少ないのではないか。これもうまくいけば、日
本人は日進月歩停滞する事なく、前進すると云
う事が云えるが、これもアジア民族で封建的社
会を持つているのは日本人だけで、古代、中世、
近代と云う発達をしたのは日本だけである。南
方、東南アジアからオリエントまで、人類文明
発祥の地は、古代文明において素晴らしい発展を
しながら停滞してしまつた。日本はオリエント
の時代にはまだ文明と云うものを持つていな
かつたが、前向きに進んで来た。

戦前は日本にはアメリカなどを研究する学
者は数える程しか居なかつた。皆ヨーロッパの
研究をしたのである。英・独・仏の研究しかせ
ず、戦後は皆アメリカの研究に入った。つまり
流行に左右されるのです。すぐお隣の中国は依
然として研究されない。今でも同文同種の国で
ある等と云つて、かつて戦前は右翼が中国と仲
良くし、戦後は左翼陣が仲良くする。中共は承
認し、日中貿易などをやらなければならぬ。
ともかく海洋日本の文明と云うものが、又もう
一度大陸に結びつけてえらい無分別な事を依
然と考えている。

一体、支那とは何か。これを考えなければな
らない。日本には實際、飛鳥・奈良朝以来、支

那の文明が入つてから明治維新まで漢学者の
中国観と云うものがあつた。これは実際の中国
を見ての中国観でなく、四書五経を読み、そう
して孔子だの孟子が説いているような思想か
らの支那観であつた。こう云う漢学者の支那観

で支那と云うものを受け入れた。ところが私は
文化類型学と云うものを考えた事があつた。支
那とは何かと、同じ考えてインドとは一体何で
あるうか。子供の時から身近に教わつている支
那がわからない。そして押んでいる仏像が、仏
教がそもそも発生したインドが何であるかわ
からない。そうしている中に漢学者の支那観を
ブチこわさなければ本當の支那と云うものが
わからないと云う事に気づいた。これからよう
やく客観的に中国と云うものがわかる様にな
つた。それからインドの場合も、奈良等の仏像
を見て、それはインドの仏像であり、インド芸
術であるなどと思ひこんでいる人が多い。又奈
良の美術など説明したりしてくれる人が、全く
インド美術と違つている、こんなものは非イン
ド的なものだと思つて説明をしてくれる人がい
ないから、インド的なものだと思つていた。と
ころがイギリス人のハーベルと云う芸術史家
の「アイデアル・オブ・ザ・インディアン・ア
ート」という本を読み、ガンダーラも仏教芸術
もインド芸術の墮落であると云う事を云つて

いると見て、ショックを受けた。そこで始めて

インドと云うものは、こう云うものだと思える
眼が開かれた。つまり我々が、インド的などと
教わつてインド的でないと一言も教わらな
かつた仏教芸術の様なもの、その源流となつた
ガンダーラ的なものは、インド芸術とすると墮
落なのであり、もつと非インド的なものだと思
う。こう云う説明にあつて始めてインドを理解
する眼が開かれた。これと同様にロシアを見る
目も教わつた。こう云う基本的な認識が日本に
欠けている。同文同種等といっても、支那と日
本の言語構造が全然違つている事は御承知の
通り、ただ文字が漢字から来ているから錯覚を
起すのである。この様にして我々が疑問を起し
ていないところに沢山疑問を起し、突つ込んで
見なければならぬ問題が沢山ある。

日本の学問等は、ヨーロッパについてはヨー
ロッパの好い研究があるからなんとかつてい
けるが、東南アジアから支那、朝鮮等、日本
に近い所、つまり日本人が独力でやらなければ
ならない所になると、まだまだ深く研究されて
いない。疑問を出せばよい。朝鮮とは何か、北
京とは何か、インドネシアとは何か、こう云う
初歩的な疑問から入つて行き、本當に学問と云
うものの研究を深めてみなければならぬ。そ
の為には今、デモクラシーだの海洋民族だの云
う例をもつて話したが、いろいろ深く日本の現
存しているものについて疑惑を起して見る、こ

う云う事が大切なのである。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。